

江戸町中学校では、毎週金曜日、朝読書の時間を利用して、三人組で、読んだ本の内容を紹介し合う「グループトーク」を行っています。

次に示すのは、二年一組のAさんが選んだ「輝く葉」という作品です。この文章を読んで後の問いに答えなさい。

中学二年生になる賢治は、幼い頃から、自宅の庭を散策し、木々を眺めることが習慣となっていた。

賢治の生家は、東西が長辺、南北が短辺となる長方形の敷地の中心に建ち、その家を囲むように、様々な雑木が庭に植えられていた。

家の南側には、二本の櫟^{かし}の木が、一年を通して青々とした葉を茂らせている。春にはハナミズキの白い花が咲き乱れ、道路に面した垣根のトキワマンサクの紅花^{べにばな}が春の訪れを華々しく知らせる。夏には、垣根の内側で、サルスベリの桃色の花が庭を彩る。やがて秋になると、ドウダンツツジの鮮やかな紅葉が枯れゆく庭にいろどりを添える。

家の西側に目を移すと、春は梅の花が咲き誇り^{ほこ}、続いて、ヤマボウシの可憐^{かれん}な白い花が顔を出す。庭の北西の

隅には、シマトネリコの大木が、緑色の無数の小さな葉を一年中、にぎやかに揺らしている。

そんな庭木を眺めることは、賢治にとって心やすらぐものであったが、最近になって傾注しているのは、庭の北西にあるヤツデだった。

ヤツデは、野球のグローブを広げたような濃緑の葉を茂らせて、庭の隅の低い位置を占めている。ヤツデのそばには、大木となったサクランボが生い茂り、早春の無数の花に次いで一面のサクランボの実を揺らす。どうやったって、目に付くのはサクランボなのに、賢治は、その下のヤツデに惹^ひきつけられるのだった。

地面に近いところに、周囲の邪魔^{じゃま}にならぬように茂るヤツデは、学校で人前に出るのが苦手な賢治の心の支えとなっていた。控えめながらも、みずみずしい濃い緑の葉をたくましく茂らせるヤツデに、憧^{あこが}れに近い親近感をもったのかもしれない。

ヤツデが伸びていく様子は独特だ。葉と葉の間から、白い芽が伸びてきて、茎を伸ばし、葉を茂らせていく。その白い芽は、まるで庭の小人^{こびと}がによきところぶしを突き出しているように見えた。また、広がり始めた若い葉は、

黄緑であんなに柔らかいの、そのうち厚紙みたいに硬い濃緑の葉へとたくましく変容するのである。花はゴルフボールくらいの大きさを放射線状に咲く。それは、濃い緑の葉の上に転がる小さな線香花火のようだった。

◇ ◇ ◇

ある日、賢治は、用事で出かける前に、何の気なしにヤツデの植えてあるほうに目をやった。そして愕然がくぜんとした。

——あるべきはずのヤツデがなくなっている。二本あったヤツデの両方とも、無い。ヤツデが茂っていた空間はポツカリと穴をあけ、その向こう側の無機質なセメントの壁に続いていた。おそろおそろ近づいてみると、ヤツデは根元から無残に切り取られていた。周囲の迷惑にならぬように控えめに茂っていたヤツデが、なぜ？ 賢治には、自分の存在が否定されたような気がした。

すぐに賢治は家に戻って家族を問い詰めた。あきれ顔の母は、「先日、植木屋さんが来てたからねえ。ヤツデが茂りすぎてから、さっぱりと剪定せんていしてくれたんだらう。庭木のことは、全部任せてあるから……。」と言った。

賢治は、用事があったことも忘れ、再度、切られたヤツデを見舞った。二〜三センチはあるヤツデの根元の切り

口が、すでに白く乾いているのが痛々しかった。人や動物を傷つけることには敏感な人間も、植物にはこれほど残酷ざんこくなのだという感情がうずまき、身を切るような悲しさがこみ上げてきた。

それからしばらくは、庭木を見ることが辛く、学校の帰りには近くの公園で意味もなくぼうっと座りこんで時間をつぶした。家に帰ってから部屋で本を読んだり、持ち物の整理をしたりして過ごすことが多くなった。

◇ ◇ ◇

二ヶ月ほど経ったある日、ふとヤツデがあったほうに目をやった。「この庭はヤツデが安心して生きていける場所じゃなかったんだ」というさびしい感情がわき起こっていた。

——と、その視線の先に、あるはずのない存在を捉とらえて、賢治は跳び上がるほど驚いた。

なんと、ヤツデは、力強く芽吹いていた。切られた二本とも、切り口のすぐ脇わきから芽を吹き出し、もう三十センチほど伸び上がっている。走って近寄る賢治の前に、あの小人のこぶしのような芽が、しっかりと上を向いていた。その下には生えたばかりの黄緑色の若い葉が複数揺

れている。

「やった！」と言いながら賢治は、小人に負けなくらい両手のこぶしを高くかかげた。

その後の成長は、驚くほどだった。庭の北側の地下には、水脈があるらしく、どんな植物の生育もよかったが、ヤツデの成長は群を抜いていた。もしかしたら、植木屋は、このことをよく知っていたのかもしれない。

半年も経つと、ヤツデは切られる前の勢いを確実に取り戻していた。

◇ ◇ ◇

それからしばらく経った、ある秋の夜。美しい満月に惹かれて庭に出た賢治は、家に戻り際に、何気なく北側の庭の暗がりを見つめた。そしてそこに、不思議なものを見た。

それは、暗闇くらやみにテラテラと輝く、奇妙な無数の光であった。じつと見つめながら、闇に目を慣らしていく…と、賢治は、それら無数の光の一つ一つが、ヤツデの葉であることを理解した。月明かりの下、足元に気をつけながらゆつくりと近づいてみると、光の発する理由が明らかとなった。

成長したヤツデの葉の表面は、油を塗ぬったようにつやつやである。そのつやつやの面が、満月の光を反射していたのだ。他の全ての植物が、暗闇に沈む中、ヤツデだけは、夜の庭木の王者のように、一枚一枚の葉を輝かせている。五、六歩離れて、改めてヤツデの全景を見ると…まさに壮麗そうれいであった。賢治は、しばらくの間、まばたきをすることも忘れて、キラキラと美しく輝く葉を見つめた。ヤツデは、自分が輝く瞬間を知っているのかもしれない。そして、その瞬間を楽しんでいるようにも思えた。

こんな夜中に、だれに褒められるわけでもないのに。大木の下の暗がりでは、自分を誇ることもなく。

◇ ◇ ◇

次の日、学校へ行こうと玄関を出た賢治は、昨夜のことを思い出しながら、そっとヤツデを見た。いつもと変わりがなく濃い緑の葉を、控えめに揺らしている。昨夜の輝く葉に魅みせられた賢治は、自分の心の中の何かが、小人の白いこぶしのように、力強く突き出してくるような気がした。

【語注】

・**檜**…ブナ科ナラ属の常緑樹。果実はどんぐり状。幹は堅く弾性がある。

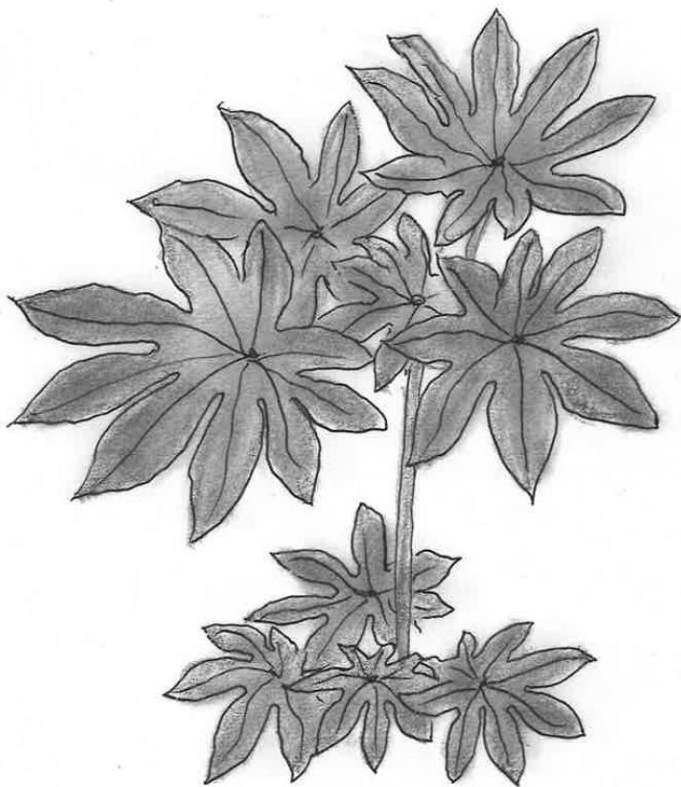
・**トキワマンサク**…マンサク科トキワマンサク属。ここでは紅色の花を咲かせる変種。

・**サルスベリ**…ミソハギ科の落葉高木。平らで滑らかな樹皮を持ち、七、九月、枝の下に小さな花を円錐状に密生してつける。

・**ドウダンツツジ**…ツツジ科ドウダンツツジ属。落葉広葉樹。白色のつりがねのような小さな花を咲かせる。紅葉も美しい。

・**ヤツデ**…ウコギ科の常緑低木。葉は長柄^{ながえ}をもち、厚く、手のひら状に広がる。

・**壮麗**…おごそかで、うるわしいさま。

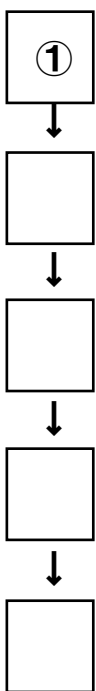


チャレンジ 1

問一 Aさんは、グループトークで、「輝く葉」という作品を紹介するために、【あらすじメモ】を作成しました。次の①に続くように、②～⑤の順番を変えて、「輝く葉」の流れに沿った【あらすじメモ】を完成させなさい。

【あらすじメモ】

- ① 中学二年生の賢治は、庭の散策が習慣となっていた。
- ② ある秋の夜、月明かりでヤツデの葉が輝いているのを目にし、ヤツデの意外な美しさを知った。
- ③ 庭には、多くの樹木が植えられており、季節ごとに美しい姿を見せていたが、その中で、賢治が最も傾注しているのは、ヤツデであった。
- ④ 控えめでありながら、困難に負けず、生き生きと輝くヤツデに、賢治は元気をもらったように感じた。
- ⑤ ある日、そのヤツデが根元から切られているのを見つけ、心を痛めた。しかし、二か月後には、再び元気に芽吹き始めていることで、安心した。



問二 Aさんは、グループトークで紹介するとき、②から⑤までの中から、特に強調したい内容を選び、文章中の表現を挙げながら、説明しようと考えました。あなたがAさんなら、②～⑤のどれを選び、文章中のどのような表現を挙げて説明しますか。

(ア) 特に強調したい内容

(イ) 文章中の特徴的な「表現」を抜き出しましょう。

チャレンジ 2

問三

文章中の特徴的な表現を一つ以上示しながら、「輝く葉」という作品を紹介しましょう。

[illegible]